

【優秀賞】

大人への入口

三原咲愛（東京都 田園調布学園中等部 2年生）

「人は一人で生きているのではない。」

よく聞く言葉である。しかし、この言葉の裏にどのような意味があるのか、この本を読むまで私は知らなかった。

主人公紀子は幼い頃から「永遠」という響きに弱かった。「永遠にできない」と言われると取り返しのつかない口スをしてしまったような焦燥を感じるからだ。そんな紀子は小学校で仲の良かった友達との別れ、ものすごく荒れて不良になった中学時代、アルバイト先でのトラブル、初めての失恋などいろいろなことを乗り越えて大人に近づいていく。そこで私は、「大人になる」とはどのようなことか、という疑問を感じた。たくさんの経験をして強くなっていくこと、社会に出て働くこと、分別をわきまえた人間になること……。いろいろと考えてみたが、どれもしつくりとこない。その答えは、高校の卒業が近づいた頃の紀子が教えてくれた。

受験も就職もどちらもやる気がなく、何も頑張らずに遊び呆けていた紀子は、ある日天文部の顧問から「五十億年後には地球が太陽に呑み込まれてしまう」ということを知らされた。形があるものもないものも、何もかもが消滅してしまうのだ。紀子はこの

ことについて真剣に考えた。それは自分自身を振り返ることもあった。そしてふと、「こうしてはいられない」と思ったのだ。ここで私は永遠なんてものはなく、限りがあるからこそ今を一生懸命に生きることには大きな意味があるのではないかと思った。きつと紀子もそう思ったに違いない。例えば、何か幸せを感じた時に「永遠にこの幸せが続いてほしい」と思うことがあるが、その幸せには限りがあるからこそ幸せに感じられるのだ、ということだ。

そして、「大人になる」とは今まで縛られてきた何かの出口を抜け、大人への入口に立つことなのだろうと思った。紀子にとってそれは「永遠」という言葉であり、永遠にばかり縛られなくても良い、この世界は大きく、変わらないものなどないということに気付くことで大人へとなっていったのだ。私の場合は、その何かとは何だろう。それは今はまだ分からないけれど、それが分かった時に私は大人になれるのだろう。

もう一つ、私は気付いたことがある。大人になるには周りの人の支えが必要だということだ。私は自分に自信がない。失敗することを恐れてなかなか前に進めないことがある。そんな時、いつも私の背中を押してくれるのは自分の周りにいる人達だった。それは友達だったり、部活動の先輩だったり、家族だったり。そして多くの人の影響を受けて私は成長してきたと思う。紀子も同じで、永遠の出口を抜けて大人への入口に立つまで、たくさんの人と関わり、支えられてきた。そして世界の大きさに気付けたのではないか、と思うのだ。自分を支えてくれる周りの人がいなければ大人にはなれないとするならば、今一番大切にしなければならぬのは、いつも背中を押してくれる、自分の周りにいる人だと思う。

「人は一人で生きていくのではない。」冒頭でも書いたこの言葉は当たり前なことだが今までそれを実感する機会がなかった。いや、本当はそこら中にたくさんあったのだ。しかし、今まで特に深く考えることなく過ごしていた。

この本は、私に今まで見過ごしていた大切なことを気付かせてくれた。それは、周りの人に対して改めて感謝したい、そしてこれからは周りの人をもっと大切にしていこう、と思える気持ちである。この気持ちに気付けたことは、ほとんどの人にとっては本当に小さなことなのかもしれない。しかし私にとってはものすごく大きな発見であるとともに、感動である。

私は、これからたくさんの人に支えられて今を生きていること、そしてこれからもそのように生きていくことで成長でき、大人へと近づいていけるということを忘れずに生きていきたい。また、私がこの本を読んで感じた感動を、自分の周りの人にも感じてもらえるように過ごしていきたい。いつか、もう誰かに背中を押されなくても前に進めるようになれた時、今度は私が誰かの背中を押してあげられるような大人になれることを信じて。

書名…永遠の出口

著者…森 絵都